電の中の鷗外は、本書の地の文としては例外的に、「少し誇張して言えば、神采奕々と言ってもよい」と形容されている。よほど印象的だったのであろう。

医史学の関係でこれに次いで多くの頁を占めるのが「C・W・フーフェラント」で、この臨床学者の生涯が、その当代ドイツの代表的知識人としての側面とともに生き生きと描かれて、有益な文章になっている。また、「内藤湖南と医学史」も、中学初級で歴史学の専門雑誌を購読したという著者ならではのもので、狭い視野に偏り勝ちな我々医学出身者の蒙を開くに充分な力を持っている。

多少私事に亙ることをお許し頂くと、前著『読書好日』・『読書游心』で高校ドイツ語の旧師菊池栄一（教材シュティフター）、竹山道雄（エッカーマン）、医学部の小川鼎三、太田正雄の諸家に再会した私は、本書で緒方富雄博士回顧の文章に接することができた。土肥慶蔵・入澤達吉・呉建ら諸家の随筆をそれぞれ扱った章もある。

漢詩文については、私は紹介者としての資格に欠けるが、詩に添えられた読み下し文が、近年往々にして見掛ける原詩の格調も律動感も無視した底のものでなく、日本人の漢詩鑑賞の伝統に沿った、安心して頼れるものであるのは、私のような読者にも有難いことであった。

三冊の随筆集を並べて見ると、どれもが愛蔵するに足る美本であるが、本書の装本が最も好もしいもののように思われた。

（三輪　卓爾）

〔小沢書店・東京都豊島区雑司谷二―四―一、電話〇三―五九九二―二四四一、平成三年十二月、A5判・変形二三七頁・定価三〇九〇円〕

『原野を拓く――関寛　開拓の理想とその背景――』

医学史の研究者には知られた名――関寛斎。通常なら隠居の身に安住する年齢になって、日本一極寒といわれる地に入植するという、一般人には奇行とも思われる行動をおこした一人の医師、関寛斎の医学の道から開拓・農場経営という両極端の道程を明らかにしたのが本書である。

既刊のものと比較すると、本書の視点を極寒の地トマムに中心をすえて、寛斎の医師としての動きが描かれている点に特色がみられよう。医師としての活動の記述に、最も適格な執筆者酒井シヅ氏が当ったことも幸いであった。医学の道に入る動機から徳島での開業に至るその道筋が、順序よく記述され、寛斎の生きざまの変化が見えてくるようである。

しかも人との出会いがいかに大切であるかということが、行間を通して感じられる。

人との出会いの大切さは他の章についても強く感じられた。そしてまた、他の章の記述は地元の研究者が筆を執っているのも当然であるし、それが郷土叢書としてのほんとうの役割を果たすことでもある。

第二章の「原野開拓」、第三章の「開拓への訴え」は、土地の貸付けという行政上の手続き以上に、それぞれの場で出会う人たちの支えによって、入植・開拓がなされるものだということを暗示させ、また実感として湧いてくる。しかし多くの支えで農場経営をすすめたとはいえ、そこに横たわる経営の苦労が如実に描かれている。

またこれまで断片的に紹介されてはいたが、寛斎の詠んだ作品が、地元出身の歌人によって、まとまったものとして紹介されたことは大変うれしい。それに、関農場の『耕鋤日誌』が掲載されたことは意義深いし、本書で初めて発表されたのではないだろうか。

記録者は寛斎の四男、関又一である。

関又一の名が出たので脇道にそれるが、ついでに又一についてふれておきたいと思う。

寛斎と交流の深かった徳富盧花が残した日記(「謀叛論」所収・岩波文庫)に「北海道の関又一から香奠弐円くれた。父を自殺させた日本一の不孝者から、父を捨殺にした日本一の不孝者への御祝儀―茅出度事である」と記されているが、寛斎の死の動機を盧花はどう受け執っていたのだろうか。又一を不孝者として受けとっているが、果してそうだろうか。

筆者は以前陸別に調査に行った時、又一を知っているある老人が「又一さんはとてもいい人でした…」となつかしそうに話してくれたことを今でも忘れられない。盧花が『みみずのたはこと』の中で寛斎のことを書いた作品は寛斎の死後で、それだけに深い思いを寄せたであろうから、寛斎の心身を消耗させたと考える又一を、不孝者に思ったのだろうか。

寛斎の理想は自営農民の創出であったし、又一はアメリカ式大農経営を理想としていたから、当然親子の葛藤は強いものであったろう。

このあたりから不孝者説が出てきたのではないか、と思うのである。

それはともかくとして、一地方の自治体が長い期間にわたって、寛斎の顕彰事業に取り組み、その結果本書の刊行に結実したことに敬意を表したいし、これは町の関係者、白里研グループ、関静吉氏らの熱意の賜物で、ある意味では、地方文化というものの在り方を示唆したと考えていいのではないか。

入植の動機も酒井シヅ氏や福島義一氏が指摘するように、最後の蘭医ともいわれた寛斎がドイツ医学へと変っていく流れから遠ざかる意味からも、北海道開拓の道を選択したのかも知れない。

しかし、もうひとつ私見を述べさせてもらうと、三男の関余作が、札幌病院医師からロシアを放浪(?)するという一種の型破りの医師と、どこか共通した親子のパーソナリティーを感じるのである。

現在筆者の手元に、余作がロシアから札幌の友人に宛てた手紙・葉書・写真などおよそ百通ほど現存しているが、親子ともかなり筆まめな人物であり、奇行とも思われる行動型の

人間のように思える。

親子揃って片方は北の極寒地に、一方は当時普通の人なら考えもしない、ロシアの軍医として故国を飛び出す心境に、共通したパーソナリティーを強く感ずる。

開拓の情報源は当然又一だろうが、斉藤竜安もその一人であったと思うと、何となく親近感を覚えた。なぜかというと、明治二年開拓判官島義勇が札幌建設のため、札幌近くの銭函という所に上陸した時、同行した最初の医師二人のうち一人が竜安で札幌病院の前身、札幌元村仮病院で医療活動をしたのは竜安一人であり、札幌最初の医師であるからである。

関寛斎が描いた開拓の理想は、今陸別の人たちによって結実しようとしている。それはまさしく、作家城山三郎氏のいう〝光もたらす人〟（序文）の願望なのである。

（大西　泰久）

〔陸別町役場町史編さん室、北海道足寄郡陸別町字陸別東一条三―一、電話〇一五六二―七―二一四一・ぎょうせい、一九九一年、A五判・二一七頁（非売）〕

松下正明編著『精神医学を築いた人びと』（上・下）

わが国の精神医学界では学説史・人物伝への関心は比較的たかく、『精神医学』誌上には「古典紹介」としてヨーロッパの論文の訳がときどきのっており、『臨床精神医学』誌は「日本の精神医学一〇〇年を築いた人々」の連載をしていた。

いまは廃刊になった『老年精神医学』誌は「老年精神医学に貢献した人々」を連載していた。この本にまとめられたのは、その連載分と、おそらく掲載予定だった二篇なのだろう。とりあげられているのは生年順に、ピネル、エスキロール、グリージンガー、シャルコー、リボー、ウェルニッケ、ピック、O・ビンスワンガー、コルサコフ、フロイト、クレペリン、アルツハイマー、呉秀三、ボーンヘッファー、O・フォクトとC・フォクト、ユング、大成潔、シュナイダー、スパッツ、植松七九郎、ショルツ、尼子富士郎、ロスチャイルド、辻山義光、エイ、ルリア、神谷美恵子の計二八名（うち日本人六名）である。尼子富士郎は精神科医ではないが、老年医学の先達としてとりあげられたのである。筆者はそれぞれの人にくわしい人であり、みずからがその人にしたしく接したことのある人もいる（わたしも呉秀三を担当した）。

じつはこの本には、おなじ松下の編集による続編二冊が予定されていて、そこにはさらに三四名（日本人八名）がとりあげられることになっている。はじめの本では、たとえば下田光造がどうしてはいらぬのかといぶかしがったが、計六二名となると、わが国および世界の精神医学史の結節点をなす人のほとんどが網羅されることになる。わが国でもこれだけのものがそろうのは見事であり、それら巨匠の息吹きを日本語で楽に感じとることができるのは、なんともありがたい。

ところで、これだけの人物がそろうとなると、それぞれの人物に関係したことをしらべるさいの便覧としてこの四冊本